

# で支援しています

# 農業を全力

## 自己改革に取り組む

J Aでは、地域を元気にするために「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」を自己改革として掲げています。

29年度は、管内農産物のブランド化などで販路の開拓を行ったほか、農業コストの低減に取り組みました。

## 水田農業の担い手を組織化

### 農業ビジョンに 734集落着手

J Aでは、昨年4月18日に水田農業担い手協議会を立ち上げました。農家とJ Aが一体となって、米の販売力強化に向けた取り組みを行っています。

主要作物ごとにも協議会や生産部会を設置し、産地の育成をすすめています。

地域ごとの農業ビジョンの策定に取り組んでいます。

地域農業を今後どうしていくのか、地域ぐるみで話

### 集落営農組合や 法人化する

集落営農組合や法人化などの組織化をすすめています。農業機械や施設の共有化、農作業の共同化で、地域の農地を守りながら、地域の水田農業を支えています。

農業の継続には、就農者の育成が大切です。

## 省力化と低コスト栽培を推進

J Aでは、研修の場として、就農者の育成が大切です。

J Aでは、研修の場として、就農者の育成が大切です。

## 地域ぐるみで 就農者支える

地域と共に歩むJ A

てトマトの学校や実証圃場、就農塾を運営するとともに、就農後も安心して経営できるような、営農指導員が定期的に巡回、指導しています。また「中濃就農応援隊」との交流を行い、地域ぐるみで就農者を支援する体制を整えています。

### 肥料、農薬価格は、 5〜20%の値下げ実現

予約購買による一括購入や商品の絞り込み、仕入れ先の見直しなどに取り組み、2年前と比べて肥料、農薬で5〜20%（当J A比）価格を下げることで実現しました。特に予約申込書掲載商品について、大幅に値下げしています。

J Aでは、研修の場として、就農者の育成が大切です。

水田農業担い手協議会とJ Aでは、定期的に役員会や支部ごとの意見交換会を開いています（2月1日、中濃支部）



農産物ごとに部会を設置しています（12月26日、夏秋トマト部会役員会）



## 多様な手法で 農業所得増大

農業を元気にするために、農家の農業所得を増やす必要があります。

J Aでは、農産物の産地化やブランド化、新規販売先の確保、付加価値をつけての販売、農業コストの低減など、地域の農業全体を考えて支援しています。

農業所得を増やすためには、「売れる農産物」を作る必要があります。

ひるがの高原だいこん、夏秋トマトや夏秋ナス、サトイモなど、販売基盤が

## 特産品を有効利用 ブランド化する



美濃加茂商工会議所観光飲食部会と共同開発した、サトイモとはちや豚を使った「はち里コロッケ」。4月から直売所などで販売予定です（1月7日、みのかも日本昭和村ハーフマラソン大会で販売）

## 様々な加工品を開発

しっかりとっている農産物の栽培をすすめて、セットで販売することで、全体のブランド力を上げています。

また、加工用キャベツなど、業務用農産物の普及にも取り組んでいます。

### 連携活かして 新たな販路を開拓

十六銀行との連携では、全国規模の商談会に参加し、新たな販路の開拓につなげています。他にも商工会や



水田の転作作物として普及がすすむ加工用キャベツ（1月9日、可児郡御高町の中川洋二さんの畑で）



新発売する「白川茶ブッセ」、白川茶が生地とクリームに練り込んであります①。2月10、11日に岐阜市で開かれた、農家で作るこだわり商品フェア②



商品を開発、開発するなど成果を着実に上げています。

生産者からの米の買い取りを強化し、今年度は約1万7千俵を買い取りました。米卸業者などに販売をする計画です。

平成17年開設の「とれっ たひろば」は、小規模農家でも手軽に出荷でき、農家の所得増大につながっています。21年には関店がオープンし、可児店とあわせて年間約17億円の売り上げが

あります。消費者にとっても、地元産の安心できる新鮮な農産物が入手できます。

J Aでは、市場の規格にあわない農産物の有効利用として、農産加工品の開発に取り組んでいます。これまでに「いちごブッセ」や「ひとくちキウイ」などを商品化しています。